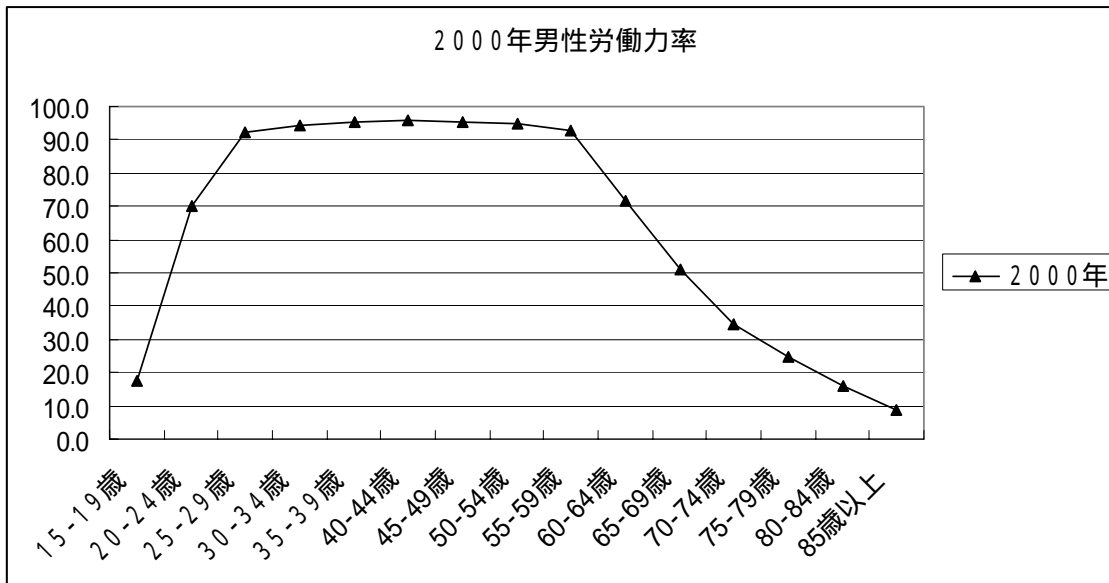


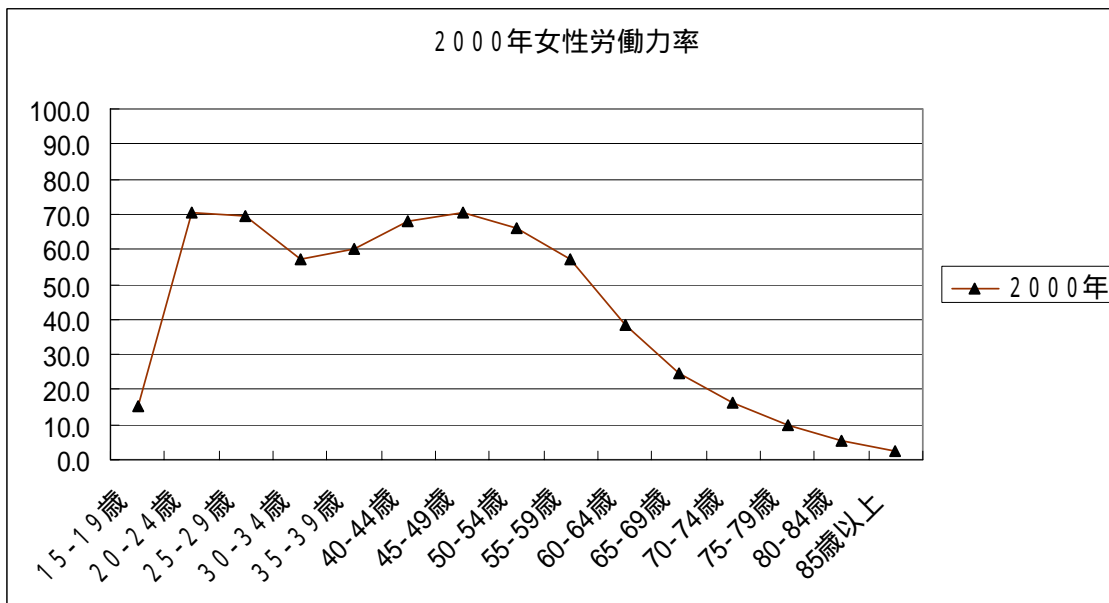
C 解答例

1-1

図表1



図表2



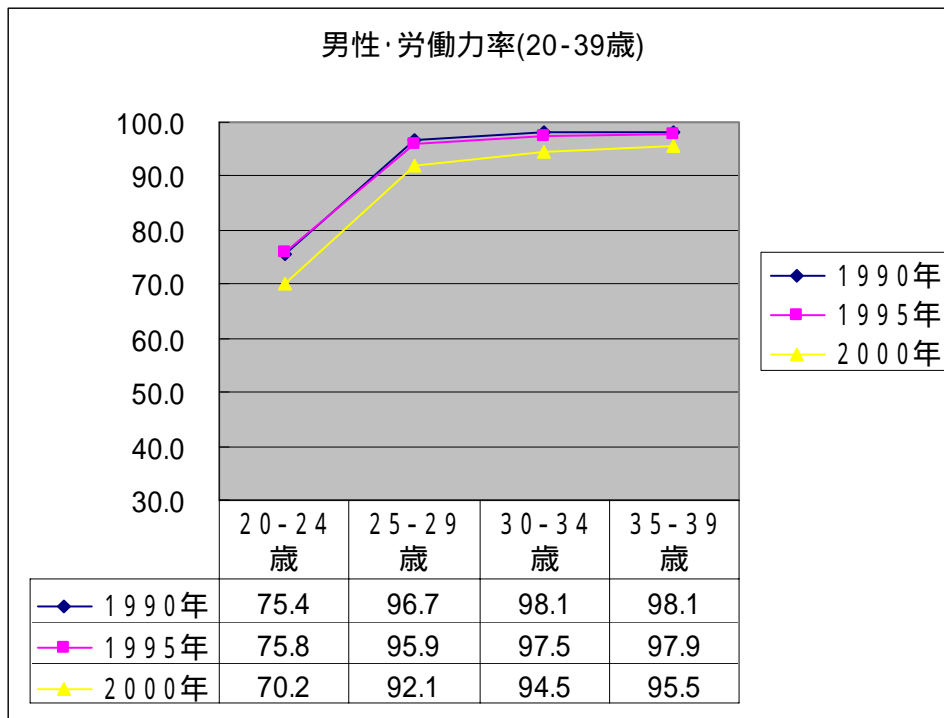
1-2

- ・ 男性が25歳以上の全年齢にわたって労働力率が高く、女性は低い。
- ・ 男性は25歳から59歳まで90パーセント台である（ほぼ台形を描いている）。
- ・ 女性は20-25歳と45-49歳に二つのピークがある（70パーセント）、そのあいだの25-29歳～40-44歳まで窪みがある（「M字型曲線」を描いている）。
- ・ 男女の労働力率が異なるのは、男性は「主に仕事」の割合が多く、女性は非労働力人口の「家事」が多い。たとえば30-34歳を見ると、男性は「主に仕事」が89.2パーセントに対し、女性は39.7パーセント、「家事的ほかに仕事」とあわせても52.1パーセントである。他方、同じ年齢で「家事」について見ると、男性はほとんどないのに対し、女性は39.7パーセントである。

- ・ 男性の場合、学校卒業後、定年まで働き続けるが、女性は結婚あるいは出産後、仕事を辞めて専業主婦となり、育児が終わると再び仕事に復帰するというパターンが多いという理由が考えられる。

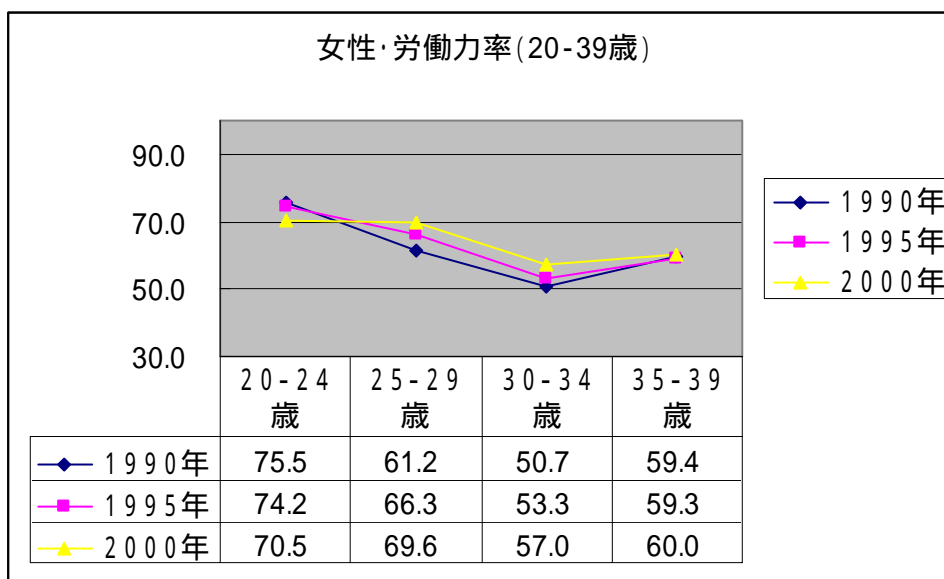
2-1

図表3



( \*解答にはグラフの部分は必要なく、表のみでもよい。 )

図表4



( \*解答にはグラフの部分は必要なく、表のみでもよい。 )

### 男性の労働力率

- ・90年から95年はほとんど変化なし。
- ・95年から2000年は、20歳から39歳までの全年齢で低下。

### 女性の労働力率

- ・90年から2000年にかけて、
  - 20-24歳：低下
  - 25-29歳：上昇
  - 30-34歳：上昇
  - 35-39歳：微増

## 2-2

### (1) 女性について

2-1の図表4で見たように、女性は年齢ごとに変化の仕方が異なっているので、年齢ごとに内訳をみていく。

まず、労働力率の増えた、比較的年齢の高い層(20代後半、30代前半、30台後半)について見てみる。

- ・労働力人口の中で「主に仕事」が増え、20代後半で8.3パーセント、30代前半で7.6パーセント、30代後半で3.5パーセント増加している(図表5参照)。
- ・非労働力人口の中では、家事が減っている。とくに、20代後半は11.6パーセント、30代前半は8.6パーセントと減り幅が大きい(図表6参照)。

次に、労働力率の減った比較的年齢の若い層(20代前半)について見てみる。

- ・労働力人口については、「主に仕事」がむしろ減り、20歳前半は9.3パーセント、10代後半は5.1パーセント減少した。(図表5参照)
- ・非労働力人口については、「家事」は減っているが、減り幅は上の年齢層に比べると小さい。また「通学」の増え幅が大きく、4.2パーセント増加している。非労働力人口では、次に「その他」が増えている(1.7パーセント増)(図表6、7、8参照)

図表5 女性・「主に仕事」

	1990年 「主に仕事」	1995年 「主に仕事」	2000年 「主に仕事」	増減
20～24歳	65.7	61.0	56.4	9.3 減
25～29歳	47.9	51.5	56.2	8.3 増
30～34歳	32.1	33.7	39.7	7.6 増
35～39歳	33.6	33.0	37.1	3.5 増

(\*必ずしも図表は解答には必要ではない)

図表6 女性・「家事」

	1990年「家事」	1995年「家事」	2000年「家事」	増減
20～24歳	11.0	10.5	8.6	2.4 減
25～29歳	37.3	31.7	25.7	11.6 減
30～34歳	48.3	45.5	39.7	8.6 減
35～39歳	39.7	39.7	37.4	2.3 減

(\*必ずしも図表は解答には必要ではない)

図表7 女性・「通学」

	1990年「通学」	1995年「通学」	2000年「通学」	増減
20～24歳	12.4	14.2	16.6	4.2増
25～29歳	0.5	0.8	1.0	0.5増
30～34歳	0.2	0.3	0.4	0.2増
35～39歳	0.1	0.1	0.2	0.1増

(\*必ずしも図表は解答には必要ではない)

図表8\* 女性・「その他」

	1990年「その他」	1995年「その他」	2000年「その他」	増減
20～24歳	0.5	0.6	2.2	1.7増
25～29歳	0.6	0.6	2.1	1.5増
30～34歳	0.6	0.6	1.9	1.3増
35～39歳	0.7	0.6	1.7	1.0増

(\*必ずしも図表は解答には必要ではない)

(2)男性について

男性については、2-1の図表3で見たように、どの年齢も労働力率は減少している。

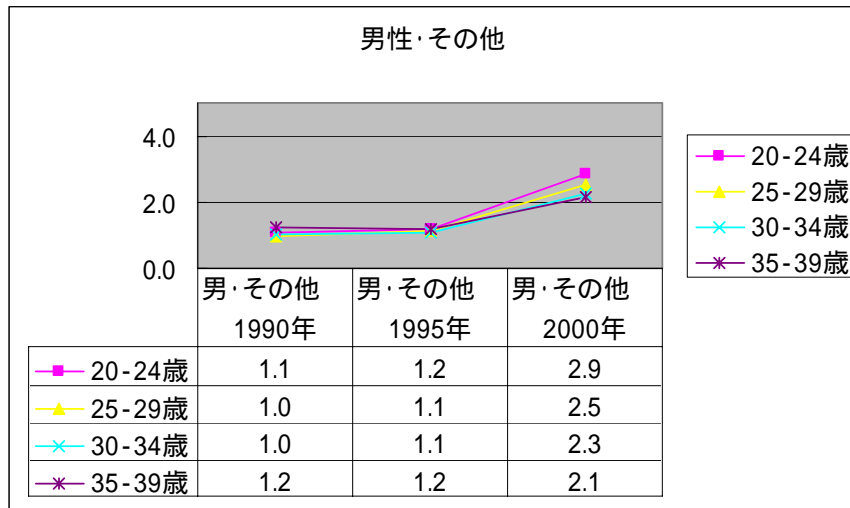
- ・ 労働力人口については、どの年齢でも最も減った区分は「主に仕事」である(しかし、失業率の増加によって相殺されている)(図表9参照)。
- ・ 非労働力人口については、最も多く増えた区分は「その他」である(二番目が「通学」)。「その他」に関しては、どの年齢も1990年から2000年の10年間で、1パーセントから2パーセントの上昇を示している。しかもその変化は、1995年から2000年の5年間に生じている(図表10参照)。

図表9 男性・「主に仕事」

	1990年「主に仕事」	1995年「主に仕事」	2000年「主に仕事」	増減
20-24歳	65.1	63.0	55.9	9.2減
25-29歳	92.7	90.0	85.2	7.5減
30-34歳	95.1	93.3	89.2	5.8減
35-39歳	95.4	94.4	91.3	4.1減

(\*必ずしも図表は解答には必要ではない)

図表 10



(\*必ずしも図表は解答には必要ではない)

### 3-1

- 1) 小説家志望の 24 歳男性。1 人暮らし。毎日の生活は、小説の執筆と気晴らしのための散歩。毎年 4 ヶ月間集中のアルバイトで生活費を稼ぎ、他の時期は執筆活動にあたる。
- 2) 職場の人間関係に悩み会社を退職した 30 歳男性。既婚、妻と二人暮らし。生活費は妻のパート収入に依存。再就職の希望はあるが、自分にあった職種を絞ることができず、現在就職活動はしていない。
- 3) 志望の大学に進学できず、高校卒業後自宅浪人中の 20 歳男性。両親と同居。
- 4) 大学を退学した 21 歳男性。両親と同居。大学に 2 年間通ったが、専門の勉強に関心がもてず中退。大学の同級生はまだ学生のため自分だけ働く気もせず、今後とりくむべき目標をさがしながら毎日過ごしている。

### 3-2

- 1) 生活費は主にだれが払っていますか。
  - A 自分(自分の預貯金。退職金、雇用保険などを含む)
  - B 自分以外のだれか(両親、兄弟、配偶者、友人など)
- 2) これまでに働いた経験がありますか。
  - A ある
  - B ない
- 3) 在学中の最終学年時は勉強に集中できていましたか。
  - A できていた
  - B できていない

設問 1 により、1 人でも生きていける「自立型」と、他者に依存せざるをえない「非自立型」を分けることができる。設問 2 により、「非自立型」をさらに、就職経験のある「就労経験型」と就職経験のない「就労未経験型」に分類できる。さらに後者は、設問 3 により学校生活は充実していたがその後進路が定まらない「所属先喪失型」と、学校生活への不適応が原因となって就労意欲がわからない「学校不適応型」に分類することができる。(下図参照)

1A	自立型				
1B	非自立型	2A	就労経験型		
		2B	就労未経験型	3A	所属先喪失型
				3B	学校不適應型